

ソードアートオンライン ～〇〇の少女

侍ナイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2022年、茅場晶彦が作り出した、VRMMORPG。デスクゲームと化したソードアート・オンラインことSAO。そのなかに生きる一人の少女が主人公。そんな少女、スノーこと○○は、死ぬことなく脱出出来るのか。

○○は話が進むと空いていきます。 キリトは、出て来る！

目次

アイン・クラット編

1話	序章	1
二話	初めてのパーティー	3
3話	デスゲームの開会宣言(チュートリアル)	6
4話	無双クエスト	10
5話	一層迷宮区とボス攻略会議	13
6話	一層攻略 イルファング・ザ・コボルド・ロードを倒せ	17

アイン・クラツト編

1話 序章

2022年、多くの人々が歓喜の声をあげた。理由は、VRMMORPG（仮想大規模オンラインロールプレイングゲーム）の新作が一週間前発売された。その名は、ソードアートオンライン。通称、SAO。

冒険式で広大なフィールドを現実のようにアバターで走り回れたり、本格的なモンスターとの戦いが楽しめることから人気だった。

「詩乃！見てみて！ナーブギア！」

「あゝ…ハイハイ、解ったから」

私の目の前に居る、呆れながら返事を返す眼鏡をかけた少女、朝田詩乃。

私が詩乃に見せている、ヘルメットこと『ナーブギア』は、茅場晶彦が作り出したフルダイブ（意識だけをゲームの中に行くことが出来る技術）することが出来る新世代のゲーム機である。

ゲーム機などが売っている店舗やGEO、TSUTAYA等で全日本で全国10000本限定で販売されていた。私は、ナーブギアをて手に入れるために東京まで出てきて詩乃と幼馴染みの桐ヶ谷直葉を無理矢理連れて2日も並んで何とか1台購入することができたのだ。

勿論私たちは、中学生でそのため、誰かが言ったのか買った後、私と詩乃の担任と学校は別だが直葉の担任にばれて次の日、怒られ昨日ようやく反省文を提出することができ現在にいたる（直葉の方はもつとひどかったとか私たちもひどかったけど）。

そして今日は、11月6日。公式サービススタートの日であるのか、説明書が難しい漢字が多く読めないで代わりに読んでもらっている。しかし、内心を読まれ「今日もお昼もらいに来たの？」と言われ、またお説教で一時間ぐらい正座をしていたためか現在、足が痺れて動けないでいた。何故か直葉やいろんな人にも内心をすぐに読まれてしまう。ここまで分かりやすいのかと思ってしまう。

食後私は、「それじゃ、行ってきます」とナーブギアをかぶり、詩乃のベッドに横になり(2、3発殴られた)、1時になると同時に「リンク・スタート」と言い、詩乃の部屋を意識だけ後にした。

始まると白い空間が広がり、システムチェックが始まる。ギューーンとログインする音が消え白い空間が暗れると回りには西洋の建物をモデルとした町が広がり、「帰ってきた〜!!」「ついに来たぞ〜!!」等と叫ぶ人達で溢れ帰っていた。そして私も

「絶対クリアやんよー!」

私は、叫ぶとそのまま町の外へ走って行った。

しかし、この時の私は、意外な再開や長い長い戦いの火蓋が開かれることになるとは一切知ることはなかった。

このゲーム、ソードアート・オンラインがデスゲームとなるまでは

：

二話 初めてのパーティー

町を出た私は、一時間ほど青い猪こと《フレンジーボア》を狩っていた。そして狩り尽くした私は、剣を腰にさしていた鞆に収めて芝の上に横になりまた現れるのを待つ。

「そこのお嬢さん、この辺りにモンスターを見なかったか？」

「ああ、ぶめんなさい。ここら辺狩り尽くして再出現するの待ってたところなの」

(以降リポップと表記)

そう言っただけで私が立ち上がるとそこには、勇者風の青年と若武者風の青年が立っていた。

「サービス始まって1時間で狩りつくしたのか!!っていうことは、あんたもβ^{ベータ}テスターか。あ、わりい、自己紹介がまだだったな。俺の名前は、クライン、でこっちが…」

「キリトだ、よろしく」

「もちろんβテスターだよ。私は、スノー。こちらこそよろしく」

私たちは、握手をした後、キリトと私でこのゲームの遊び^{戦い}方を教えるため、フレンジーボアが出現^{ポップ}(以後ポップと表記)していないか探し歩く。数分もかからず、産まれた^{ポップした}てのフレンジーボアが目の前に出て来る。

「まず、最初に剣^{ソードスキル}技(以後SSと表記)と交代^{スイッチ}(以降スイッチと表記)について説明するよ」

少女説明中…

「つまりSSは、必殺技でスイッチは、みんなで畳み掛けることなんだな」

「そー言う事だ。まず、俺が先制して攻撃するから、続いてスノーがスイッチするから、タイミングを合わせてスイッチして止めを刺すんだ」

「わかった、それじゃ頼むぜ!」

クラインの返事と共にキリトが剣を持ち、構えると初期装備である《スチールブレード》の刀身が流星のごとく青く輝き出す。光が貯ま

りきり片手剣SSの《シャープネイル》が決まる。

「よし！スノー！スイッチ！」

「OK！行くよ！」

私は、既に貯め終わっている。キリトが退くのと同時に片手剣SSの《レイジスパイク》をフレンジーボアの横から切り抜ける。

「クライン！スイッチおねがい！」

「おうよ！テヤアア！グホツ！」

クラインは、SSを立ち上げず、そのまま突っ込み男の急所？に突進され相当痛いのか悶絶する。（キリトいわく現実でやられると相当痛いを通り越して病院行きになるらしい）

「あゝ、感覚共鳴って奴ね」

「まあ、な…くそ！何で使えねーんだよ！」

「まあ、落ち着けクライン。SSは、まず構えると立ち上がってチャージが始まるんだ、そのあとは、システムが当ててくれる」

キリトは、有言実行するために落ちている小石を拾い、SSを立ち上げる。そうすると今度は緑色に小石が輝き投擲SSが発動されてそのままフレンジーボアへ当たり、攻撃され怒り突進してくる。

「クライン、今！」

「よ、よし」

私の合図と共にクラインの持つ曲刀《海賊剣^{カトラス}》の刀身が炎の用に赤く光だし曲刀SS《リーバー》が発動しフレンジーボアを消滅させた。

「しよっつっしやああ！倒したぜ！」

「おめでどう、だけど今の奴、ドラクエで言う、無配合スライム相当だけどな」

「ま、マジかよー…」

三人で狩り続けた私たちは、かなりレベルが上がり、私とキリトが5レベル、クラインが4レベルまであがって来ていた。

「ここまで夕日が綺麗なんてな。ほんとにゲームの中とは思えねーよな」

「ああ、最初はな」

「確かに、ここまでリアルだと少し怖いくらいだけどね」

この完成度の高い世界に感動しながら話をしてしていると三人のお腹の音が鳴ってしまった。

「あははは…、こんな時間だもんな」

クラインが指をさす。もちろん空ではない。私たちの視界には、デジタル時計と自分の体力が斜め上に表示されている。時計は、丁度五時を指しており、「確かにね」と私は、相づちうつ。

「俺は、これからログアウトすつけど、どうすんだ？」

「私は、もう少しキリトと狩りをしていようかな」

「えっ？」

「そっか、後で一緒にSAO買った奴等と落ち合う予定なんだがどうだ？」

「あ、その…」

キリトの顔色が悪くなり、クラインは、直ぐに「無理には、言わねえよ」といい「悪いな…」と返す。その後、クラインと別れた…「あれ？おかしいな？」

「どうしたんだよ、クライン」

「それがよ、ログアウトパネルが消えてるんだよ」

「まさか」

私とキリトは、右手を振り落としアバターメニューを開いてギアのマークのパネルをタッチしてシステム一覧を開くと、クラインのだけでなく、キリトや私のパネルからログアウトパネルが消えていた。

どうやってログアウトするか討論していると鐘の音が第一層中に不気味に響き渡る。

その後私の予感が当たるとは思ってもいなかった。今思うところの日の4時半位までの時間がログアウト出来る状態で永遠に続けば良いなと思う位だった。

3話 デスゲームの開会宣言（チユートリアル）

リゴーンリゴーンと鐘の音が不気味に響き、いままで綺麗だった夕焼けが不気味に感じてくる。

「何なんだよ、こんな時に」

「ここって、始まりの街？」

ここは、《始まりの街》。私たちがログインして最初に出てくる始まりの街中心部に位置する大広場にいつの間にか強制転移させられたのだ、このゲームにログインしているほぼ全プレイヤーがここにいる。中には「速く出てこいG M!!」「どうしてここに…」まさにパニック状態である。すると誰かが「お、おい、上を見ろ！」つといい見上げるとそこには、六角形の血のように赤い警告！と英語で書かれたプレートが点滅していた。ここにいる全員がそのプレートを見ると、二層の底を埋め尽くす勢いでプレートだらけになり数秒もしないで真っ赤になる。

するとプレート同士の隙間から血のような液体が流れだし、空中でとどまり謎の液体やプレートと同じ色のフード付きのローブと清潔感漂う手袋へ変わってゆく。顔なしの巨大アバターがそこに現れる。『プレイヤーの諸君。私のゲーム世によるこそ。私の名は、茅場かやほ晶彦あきひこ。今やこのゲーム世をコントロールできる唯一の人間だ』

顔なしのアバターがいきなり、茅場晶彦と言い私やここにいる約10000人がここで直ぐに現実に帰れるという気持ちを次に言った言葉で、裏切られてる。

『プレイヤー諸君は、既にメインメニューからログアウトボタンが消滅している事に気付いていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返す、SAO本来の仕様である』

「これ、イベント…だよね…」

「ああ、多分な…」

私は、茅場晶彦がどんな人なのか知っている。若き科学者でナーブギアとSAOの生みの親。そんな彼が脱出できないと言ったのだ。それぐらいなら別に慌てる必要は無いと思っっている、災厄の事態にな

らない限りは。そして巨大茅場は、話を続ける。

『…また、外部の人間の手による、ナーブギアの停止あるいは解除もあり得ない。もし、それが試みられた場合——』

この時私は、フラグを回収した。巨大茅場の次の言葉が簡単に予測でき、恐怖で涙が出てくる。五月蠅かったのが一瞬恐怖で回りの人達も次の言葉を理解する。

『ナーブギアの緊急素子が発する高出力マイクロウェーブが諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

ここまででようやく理解した人たちは、棒立ち状態になってしまふ。私の隣にいるクラインとキリトは、直ぐに答えにたどり着き残念なイケメン顔になってしまう。

それもそのはずだ。ナーブギアは、出力回収部分が首の当たりであり（脊髄の真上）細かな情報識別システムがある。それで7割がナーブギアに入っている。残りの3割は、バッテリーセルがつまっている。これだけあれば巨大茅場の言う通りナーブギアを頭に被る、電子レンジの出来上がりだ。

「瞬間停電なんてあったらどうなるんだよ俺たちは」

『より具体的には、10分間の外部電源の切断、二時間以上のネットワーク回線の切断、ナーブギア本体のロック解除または分解、破壊の試み——以上のいずれかの条件によって、脳破壊シークエンスが実行される。ちなみに諸君の家族や友人等が警告を無視してナーブギアの強制除装を試みた例が少なからずあり、その結果残念ながら、既に213名のプレイヤーがアインクラッド及び現実世界からも永久退場している』

ここにいる私やキリト、クラインを含めた9787人の恐怖で包まれ、クラインのように立てなくなる人もいれば、キリトのように立つのが精一杯の人や私のように泣き出す人もいる。だが巨大茅場は、更に追い討ちをかける。

『諸君が向こう側に置いてきた肉体の心配をする必要は無い。現在、あらゆるTV、ラジオ、ネットメディアは、この状況を多数の死者が出ている事も含め、繰り返し報道している。諸君のナーブギアが強引

に除装される危険は、既に低くなっていると云ってよからう』

安心できるかつと突っ込みかけてしまった。理由は、簡単だ。私と詩乃は、通っている学校で有名ないじめられっ子なのだ。もし今、詩乃の家にいじめグループがやって来たら、確実に病院に搬送される前に殺されるだろう。いじめられている理解については、もしこのゲームを脱出出来た時にでも話そうと思う、多分…

少し話を聞いてないうちに話が少し進んでいた。

『諸君には、安心してゲーム攻略に励んでほしい』

周りからは、「ふざけるな!」「あ、やっぱりイベントか…」等なぜか安息の声も聞こえてくる。なぜか自分が安息して目の前が真っ暗になっていた。

「ス…おい…スノ…おい、スノー!」

「ひゃい!ここは?」

「始まりの街だ」

私の前にいる、男の娘とおっさんが居た。

「おっさんじゃねえ、まだ22だ。失礼なやつだな。ついでにだかクラインだ。此方の男の娘がキリトだ」

「え?エエエ!!」

その後、キリトとクラインが私が気絶した後の事を話してくれた。HPがなくなると現在でも死ぬこと、復活システム事態が無いこと。顔われ鏡の事。そしてキリトが提案を出す。

「俺は次の街へ向かう、お前らだけならどうにか」

「悪いな…一緒に来たダチをおいては行けね…」

「私ももう少し休みたいから…」

「そ、そうか」

キリトの悔しそうな顔がうかがえる。その間私は、アイテムストレージを開いていた。

「あ、そうだ。二人とも現実の顔だから、私もつかちやおー」

「やめろ、俺たちの夢が…」

クラインのストップを聞かずに私は、顔われ鏡を使う。すると私を包むように青い光が包む。1、2秒経つと光が消え、さつきより高

かった視界が低くなり二人を見上げる形になる。

「小さいせえええ!!」

二人の言う通り、さつきは、ボツチユボンだったのが今は、断崖絶壁である。そして、勇者版キリトと年齢差がない顔だったのが今のキリトより更に幼い顔立ちなのだ。仕方ない面もあるが数秒後二人の悲鳴がパニック状態の人たちの悲鳴よりも大きく響いたのだった。

4話 無双クエスト

早三日がすぎ私は、2つ目の街《トールバーナ》に来ていた。そしてこの街には、私と私のパーティーとNPCしか居らずかなり、寂しい街だ。

ここまで、早めに来た理由は、難しいがいい報酬がもらえるクエストがあるためだ。回りがここに来れるレベルになる前に終わらせなければ、クエストの取り合いになりかねないからだ。1層ではあり得ない位難しく私は、β版の時にこのクエストで2回ほど始まりの街に戻されるほどかなり危険なクエストなのだ。

このクエストでの報酬は、2つあり1つは、スキル拡張ができもう1つは1層のボス情報なのだ。

順番待ちになるよりも恐ろしいところがあり上の層へ行けば行くほど更に難しくなり、例をあげるのなら、

10層まで行けるのであれば1層から10層迷宮区までのモンスターが襲いかかる、そんなクエストのため早めにここに来てたのだ。

「おーい、悪い、遅れちゃって」

ようやく私のパーティーメンバーがやって来る。爽やかな青年のミント。そして、

「すいません…」

と言いながら、息を調えているユリカ、

「つたく、ユリカは、もうちよと速くしないとナ」

そして、ユリカに注意をしている、ネズミ鼠ことアルゴだ。

全員集まった私たちは、迷宮区側のトールバーナ出入口に向かう。勿論個々からがクエスト開始地点なのだ。

「さあ、いくぞー！」

「「オー!!」」

トールバーナから出ると目の前に

クエスト 《百鬼夜行》

クエスト開始

と英語で表示され、私たちのヘイト値が変化し本来、森に生息する、

《リトルネペント》に始まりの街周辺に生息するフレイジーボア等、1層を代表するモンスターたちの群れが現れ、此方へ特攻してくる。

私たちのパーティーの平均レベルは7、8位なので容易く蹴散らしてゆく。だんだんとモンスターの数も減ってゆき、前に出ていたミニトが此方へ戻ってくる。

「おい、スー。ヤバイ事になったぞ」

「ヤバイ事って何」

「《実付き》が居やがる」

「なっ！」

リトルネペントには、主に3種類おり一般的な葉っぱを着けた物が殆どだ。希に《花付き》や《実付き》が出現する事がある。《花付き》と《実付き》は、普通のと同じ強さなのだが、《実付き》だけ違い、謝つて実を攻撃すると馬鹿でかい破裂音と強力な異臭で他のネペントも呼び寄せてしまう、危険性があるのだ。しかも、このクエストで破壊してしまうともれなくフレイジーボアもやって来る。そのため、実を攻撃しないで倒さなければならぬのだ。

「ど、どうします？」

「確かにナ。この数だと、さすがに不味いゾ」

「ピックで潰す」

私は、腰の一部に着けたピックを取りだし投剣SSを使い、そのままネペントに飛んでいき、直撃する。すぐにユリカがスイッチして《実付き》を倒す。

だが、ここまで特攻してきたモンスター達は一気に逃げたし、1匹だけコボルド系モンスターが居た。モンスター名が表示される。名前がなんと

《イルファング・ザ・コボルドロードJr.》と。

あいつに子供居たのかつと考えているといつの間にか私は吹っ飛ばされていった。体力ゲージを見るとレッドゾーンに到達しており、ほぼ死にかけの状態になってしまう。

「一撃重すぎるよ……」

「スー、大丈夫か」

「二様ね」

ポーションを飲みほし、体力がみるみる回復してゆく。J r. は、私に止めを入れるために近づいてくるが腹と背中にダメージエフェクトが付き一つ目のゲージの1割削れる。そのまま、攻撃と隠れながら全ゲージをほぼ削りレッドゾーンへ突入し、盾と片手斧を投げ捨て、腰に着けていたタルワールを抜刀する。しかし、β版2人居るため、5秒かからずJ r. は、ホリゴン片となり消える。すると目の前に

クエストクリア

と英語で表示され、無事終わった事が私たち四人のレベルアップの効果音と共に鳴り響く。

「いよしやあああ!!」

「生き残れましたね」

「うん…っ!!」

私は、この後の記憶がなく戸惑った。後に私…いやこの世界に居る殆どのプレイヤーの意識が無くなった事件を《大切断事件》と後に呼ばれるようになった。

そして、約一ヶ月後残りのプレイヤー数 約8000人 うちβテスター数 約700人

ログアウト数^{死者}が 約2000人うちβテスター数300人

12月1日 トールバーナ

??? side

「あの子は…」

いつの間にか、彼女の事を見ていた。知り合いにそっくりな金髪の少女の事を。

5話 一層迷宮区とボス攻略会議

2日ぶりに私は、《トールバーナ》に帰ってきてそのままNPCから借りている部屋のベットへそのままダイブした。

この二日間は、主に《アニールブレード》という片手剣を獲得できるクエストを受けるために《ホルンカ村》へ行っていたため、相当眠い… というのが二週間前の話だ。

で、現在私は、第1層迷宮区へ来ている。計20階層で出来ており21階は、第2層になっている。そして、イルファング・ザ・コボルドロードJr. を倒してからと言うものの、レベルが上がり難くなっていた。そして今、久々のファンファールが鳴り響く。

「五月蠅い…」

その声だけ静かに響く。回りには二週間前までいた2人は、居ない。

二人とも私をかばってポリゴン^死粒子んでしまった。

アイテムも少なくなり、町へ帰ろうとすると赤いケープを被った女性プレイヤーを運ぶ^{キリト}変態が居た。

迷宮区とトールバーナの道まで彼女を運んだ。キリトとは倒れた彼女を迷宮区から出すのに運んでいた、私も手伝ったが。

お互いに久々にNPC以外の雑談を楽しんでいた。少しすると、彼女が目をs…

「余計な………ことを」

この言葉にかなりの怒気を感じた私は全てキリトに押し付けてトールバーナに逃げたのだった。

「よお…きつきは、よくもオイテツテクレタナ？スノー」

「嫌な感じがしてさ、ね」

キリトの後ろに居る、彼女にすごい怒気で言われたら、流石に怖い。ただ、逃げたときは違い物欲しそうな目で私を…いや、私の手にある『クリーム付き黒パン』を見ていた。

この『クリーム付き黒パン』はNPCが営業しているパン屋で1コル(ゲーム内通貨)で買える黒パンに、トールバーナのクエスト《逆襲の雌牛》のクエスト報酬で貰える、クリーム入り壺を黒パンに塗るとできるアイテムだ。

「た、食べる?」

彼女に『クリーム付き黒パン』を差し出すと小さな声で「ありがとう」と言うと同時に四時を知らせる鐘が鳴る。

「今日、第1層ボス攻略会議をやるんだ、一緒にどうだ?」

「ゴボルドロードの部屋が見つかったの!」

「ああ…」

私達は、キリトと共に《トールバーナの広場》に来ていた。既に来ていた人達は私を見る。

ゲームでは、ほとんどの女性プレイヤーがネカマ(女性アバターでプレイする男性のこと)である、そのため私のようなリアルでもアバターと同じ女性はとても少ない。

「はーい!!少し遅れたけど始めさせてもらいます!!」

広場の中心に青いわk:髪色のブロンズ系防具を着た男性が居た。

「みんな、オレの呼び掛けに応じてくれてありがとう。オレは、ディアベル。気持ち的にナイトやってます!」

青わk:ディアベルのギャグに「勇者って言いたいんだろ」などツツコミが入る。

「冗談はそこまでにして。…本題に入ろう。今日、この層のボス部屋を見つけた」

広場の柔らかな感じが一気に引き締まる。

「だが、ボスは一人では攻略できない。パーティーを作ってくれ」

ディアベルの指示で次々にパーティーが出来上がっていく。私もキリトとフェンサーさん(名前がわからないので)にパーティー申請を出し、私をリーダーにキリトとフェンサーさんことアスナさんのゲージが現れる。

「ちよつと待たんかい!!」

声がした方へみんなむくとそこには毬栗頭の男性が居た。

「ワイはキバオウっていうもんや、こんなかに詫^わび入れなあかん奴等が居るやろ」

「キバオウさん、それは《ベータテスター》の人たちのことかな」

「そうや」

キバオウは広場の階段を一飛で降りる。

「やつらは、こんクソゲーム始まった日にビギナーを見捨ててウマイ狩り場やボロいクエストを独り占めしてやつらはらだけほんぽんや…「ふぎけんなよ!! 毬栗野郎!!」…何するんや!!我!!」

私は気付いたらキバオウさんを馬乗りになって殴っていた。少しして私の腕を掴んだ巨漢な外人男性が居た。

「落ち着け…ここで暴れても何も解決にならないだろ。オレの名はエギル。大丈夫か」

「助かったわ」

「あ…すみません…」

「あんたが言いたいのは、ベータテスターがビギナーの面倒を見なかったから大勢死んだ。謝罪・賠償しろと」

「まあ、そうや」

「そつちの嬢ちゃんはや早い話、死んだのはビギナーだけではなくベータテスターも亡くなったと」

「私もテスターだった…亡くなった知り合いをバカにされたと思って…」

エギルは大きなため息をつき、一冊の本を取り出す。

「まずこのガイドブック。あんたも貰っただろ。一層の道具屋で無料配布しているからな」

「…私、有料だった」

「ベータテスター価格やろ…多分」

後で知ったのだからテスター全員有料だったそうだな。

「あまりに早すぎる発行オレは、この情報元は嬢ちゃんたち元ベータテスターたち以外にあり得ないと思った、

情報はあつたんだ。SAOと他のゲームと同じと考え引き際を間

違えたたりしたからだ。こうならないよう、どう攻略するか討論されると思っていたのだがな。」

亡くなったベータテスターたちのほとんどベータとの違いを探しているときに運悪くやられてしまったのだ

「まあ、いいわ。今は従^{したが}うといたる」

キバオウさんは一番前の席に座り、私はディアベルに連れられて隣にたつ。

「元ベータテスターの君が居るなら少しは攻略も捗るだろう」

その後、私は攻略本を教科書を読むかのように説明した、勿論これはベータの時の情報だと。

翌日、目対話になるが原作道理キリトがビーターになったのだった。

6話 一層攻略 イルファング・ザ・コボルド・ロードを倒せ

日が登り始めた頃私たちは1層迷宮区のボス部屋の前に居た。

「スノーさん、最後の確認をしましょう」

と言いみんなとボス攻略の確認と武器の状態を確認する。

「じゃあ、みんな開けるよ」

私は扉に手を着けて押すと、重い扉かゆつくりと開いてゆく。

開ききった瞬間に勢いよく暗い部屋に入るといきなり明るくなると、そこには椅子に座った巨大なコボルドと小柄だけと重い武器を持ったコボルドが現れる。巨大なコボルドの横に4本のメーターが現れ名前が表示される。

「Illfang The Kobold Lord」(以後コボルド・ロードと表示)

コボルド・ロードの叫びで小さなコボルド達は、一斉に部屋にいる私達に襲いかかる。

「パターンCだ！タンク隊前に！」

「センチネルを相手にしている部隊は、倒し次第ボスの攻撃に参加して！」

「了解!!」「おお!!」など返事が帰ってくるのと同時にセンチネルの一体が私達の部隊にやってくる。

センチネル達は、十分にレベリングした私達にはかなわずすぐに光の破片になって消えてゆく。

「ディアベル!!センチネル片付け終わった!!」

「全体!!突撃!!」と言うと全員でSSをうち続けていると4段目のゲージが赤くなつてコボルド・ロードは疲れた表情を見せるがすぐに息を整え持っていたバックラーと片手サイズ斧を投げ捨て、怒り狂う。

「予定道理やな」

「俺が出る」

「ディアベル!」

ディアベルがコボルドロードに止めを指すために上がるがしかし相手の手には、タルワールでわなかつた。

「下がれディアベル!!」

「間に合え…!」と何とかディアベルの前に出てコボルド・ロードの攻撃を受け止め、武器を確認した私は寒気を感じた…相手の武器は…刀だった。

刀は曲刀スキルを上げていくと出で来る e x t r a c s k i l l d a .

「大丈夫、ディアベル!」

「あ、ああ何とか…」

「キリト! 私が前に出る! 刀スキル説明を頼む!」

「わかつた!! みんな集まってくれ!!」

キリトが刀スキルの説明が終わるまで時間を稼ぐ。

「そんなの…勝てるわけねえ…」「俺達はここで終わるんだ…」みんなの士気が下がっていくのがわかる。

「みんな!! 大丈夫だ!! 相手は瀕死だ!! 絶対勝てる!! 行くぞ」

「そうだな、あんな小さな子1人に任せておけねえ」

「下がれ!! スノー!!」

「え?」

気づいたらいつの間にか私は床に倒れていた。

「嘘…」

「大丈夫か? 今、回復してやるからな」

「ありがとう…」

私の体力ギリギリ残っていたためすぐに味方が来て回復してくれたため何とか死なずにすんだ。

「アスナ!!」

SS後で動けずに居たが「うちのパートナーに色目使ってるなよ」といいながら止めを刺した。コボルド・ロードは大きく膨らみ爆発し光の破片になって消えてゆき、王座の上にステージクリアと英語で出で来る。

「やったー!!!」「生きてたー!!」と喜びあつたが1人それに水を差す者

が居た。

「おい、何で最初からボスの攻撃を教えなかった」

「私は最初にβ版とはちがうかのうせいがあるって言ったはずなんだけど?」

どこから不信感とは違う感じがしたが人が多くてわからなかった。

「違うだろ?ラストアタック(以後LA)が目当てだったんだろ?だから最初っから教えなかった。そうだろ?」

「LAだと?LA欲しさに黙っていたのか」

「…教えなかったのは…うらg…「俺が脅したんだよ」ちよ?!キリト!?」

私に向いていた不信感がキリトに向く。

「待つてよ。私はキリトに脅されていない!!!私が伏せていたんだよ!!!」

「おいおい、そんな嘘だ。それもor…」LAに目がくらんで裏切る人が出ると思って黙ってたんだ…」…ったく」

「ごめん、キリトかばってくれるのは、うれしいけどそんなことしたら余計にベータとビギナーに溝が出来ちゃうから」

不信感が薄くなってゆく。だが1人小さく舌打ちをした後一層へ戻ってゆくのがいた。

「ごめんなさい、本当の子とを黙っていて」

「っ…次は許さんからな…」

「はい…」

話が終わりみんな二層に行こうとするがキリトが止める。

「悪いが、二層のアクティベートに行くんだか出来れば一層で待つててくれないか」

「なんでや?」

「上の層に上がるたびに前の層のボスのクラスの奴も徘徊しているんだ。安全な道をわかっている俺1人で行きたいんだ。いいから」

「ふん…だったらとっとと行け」

「わるい頼む」

一層始まりの町

「キリト、これから祝勝会するんだけど来ない？」

「いや、遠慮しとくよ素手スキル取りに行きたいからな」

「そ、頑張れ」

キリトはそのまま、二層に戻っていく。後ろ手「はよこい」と言うキバオウさんがいるが何故か町に残っている人たちの目が冷たかった。

「なんじゃこりゃあああ!!!」

SAOでは新聞を書く人が居り、その新聞は『悪人ベータースター、ベーター二層で岩を殴る』と一層突破の記事の次に大きかった。